

読書推進運動



公益社団法人
読書推進運動協議会

〒162-0828
東京都新宿区袋町6
日本出版クラブ会館内
TEL 03(3260)3071
FAX 03(5229)1560

発行人 宮本 久
編集人 片岡 伸子

定価 60円 会員の購読料は
会費の中に含まれる

No.595

★「第56回 全出版人大会」開催(4頁)
★野間読書推進賞 受賞者の活動報告(5頁)



北海道日本ハムファイターズと連携した 読書応援企画展

北海道教育庁生涯学習推進局
生涯学習課長

ふなき
まこと
船木 誠

2004年に本拠地を北海道に移転したプロ野球球団「北海道日本ハムファイターズ」は、年を追うごとに「地域に密着した球団」として定着してきています。

ファイターズでは、野球以外にも地域活性化につながるさまざまな取組を進めており、ファイターズ読書促進全道キャンペーン「クラブを本に持ちかえて」もその中のひとつです。

「クラブを本に持ちかえて」は2014年から行われており、選手会プロデュースによるオリジナル絵本『もりのやきゅうちーむふあいたーず』の制作やブックシェアリングなどが行われています。

北海道と日本ハム株式会社は包括連携協定を締結してお

り、家庭教育や子育て支援を連携・協働の取組のひとつとして、北海道教育委員会では、ファイターズから、選手のお勧め本リストや実際に本を読んでいる写真データなどの提供を受け、希望する道内の市町村立図書館や学校などで展示し、家庭での読書を促進する「北海道日本ハムファイターズ読書応援企画展」を実施しています。

3年目となった昨年度は、ファイターズの札幌ドームにおける主催試合の演出・装飾テーマである「FIGHTERSGALAXYBASEBALL」に関連し、少年時代、天体を仰ぎ無限の星空に憧れを抱いた栗山監督と選手18名が、宇宙にまつわる書籍や絵本を紹介するという企画

で募集しました。その結果、前年度を大きく上回る89の市町村立図書館や学校などからの希望があり、企画展が開催されました。

ここで、いくつかの企画展の様子を御紹介します。滝川市立図書館では、「監督・選手のおすすめ本」を実際に展示したほか、ファイターズに関連する本やグッズも同時に展示しました。また、監督・選手にメッセージカードを送るコーナーも設置し、集まったメッセージカードを球団に送付しました。

網走市立図書館では、同市内の大学出身の井口和朋投手にちなみ、「がんばれ井口投手! がんばれファイターズ応援特別展」との同時開催で本企画展を開催しました。そ

の相乗効果により、期間中の来館者数は過去5年間で最多になったということです。さらに、ファイターズでは、地域活性化につながる活動として、選手が道内の全市町村で地域の人たちと交流を図りながらまちづくり・まちおこしに寄与していく「北海道179市町村応援大使」を行っており、紋別市や剣淵町ではこの「応援大使」とコラボして企画展を開催しました。特に剣淵町では、昨年度の同町の大使であった中田翔選手が企画展を訪問し、『もりのやきゅうちーむふあいたーず』の読み聞かせを行ったそうです。

この企画展は、球団から提供されたデータを生かし、各館・学校などが創意工夫をこらして開催できるのが大きな特徴で、「普段あまり来館しない中高生男子の利用が増えた」など多大な効果があったとの報告を多く受けました。今年度の連携した取組は未定ですが、読書活動のよりいっそうの定着を目指した活動を考えています。



1997年・第39回



2013年・第55回

杉田 豊さん ありがとうございました

1997年(第39回)から2013年(第55回)まで、「こどもの読書週間」ポスターのイラストおよびデザインをいただいた杉田豊さんが、5月19日に逝去されました。

杉田さんは、「こどもの読書週間」ポスターの制作を「グラフィックデザイナー、イラストレーター、絵本作家としての私の生業を集積した作業」とおっしゃって、毎年、事前にメインの動物を決め、決定した標語からよりイメージをふくらませて制作されました。

「こどもの読書週間」が50回を迎えた2008年には、それまでのポスター原画を記念絵はがき制作と、ゲートシティ大崎で行われた「国際子どもの本の日」イベントでの展示にご提供いただきました。

ポスターはB3サイズですが、原画のサイズはB6ほど。拡大したときの効果をねらって、凹凸のある紙にハツとするほどあざやかな色で描かれていました。

杉田さんの手がけたポスターの一部を、ここに紹介して、ご冥福をお祈りし、あらためて感謝の意を捧げます。



1999年・第41回



2000年・第42回



2003年・第45回



2008年・第50回



2011年・第53回

日本児童文芸家協会 4 賞贈呈式

物語、体験を子どもたちの心に届ける手法を評価

5月19日(金)、東京都千代田区のアルカディア市ヶ谷で日本児童文芸家協会の各賞贈呈式が行われた。今年の受賞作は以下のとおり。

●第41回 日本児童文芸家協会賞 (該当作なし)

●第46回 児童文芸会新人賞 『ぼくたちのリアル』

戸森しるこ (講談社)

●第1回 児童文芸ノンフィクション文学賞 『東京大空襲を忘れない』

瀧井宏臣 (講談社)

●第56回 児童文化功労賞

いもとようこ

鈴木征治

日野多香子

協会賞は残念ながら、今回は該当作なしとなった。

新人賞の戸森さんは「未完成だった原稿を、デビューのきっかけとなった講談社児童文学新人賞の選考委員の先生と編集者が完成させてくれた。私の空想に過ぎなかった物語が、いろいろな人の力によって本になりました」と感謝を述べた。

今回は初回となるノンフィクション文学賞の受賞者も、この作品の

特徴だと思えます」と語った。功労賞のいもさんは「この仕事は家で毎日コツコツする、孤独な仕事。どこかでだれかが見てくれていたんだと、とてもうれい」、鈴木征治さんは理事長を務める浜田広介記念館の紹介を、日野多香子さんは「まだまだ引退するんじゃないと背中を押してもらった」と語った。



花束を手にした受賞者のみなさんの記念撮影

■「第47回 学校図書館賞・第19回 学校図書館出版賞」

知的障害特別支援学校の実践を評価 出版賞は多彩なテーマの図書が受賞

6月2日(金)、東京・中野区の中野サンプラザで「第47回 学校図書館賞・第19回 学校図書館出版賞」(主催)日本学校図書館振興会/全国学校図書館協議会)の表彰式が行われた。

《今年度の受賞者》(敬称略)

第47回 学校図書館賞

《実践の部》

鳥取大学附属特別支援学校
事由||一人一人のニーズに応じる「知の拠点」としての学校図書館をめざして/知的障害特別支援学校の挑戦
村松金治賞
鳥取大学附属特別支援学校(重賞)
事由||同右
(学校図書館大賞は該当なし)

第19回 学校図書館出版賞

株式会社 岩崎書店
事由||『賢治童話』ジュニアル事典
/岩崎書店編集部 編 中地文監
修の刊行
株式会社 大月書店
事由||『根っここのえほん』(全5巻)
/中野明正 編、中野明正ほか著
小泉光久 文、堀江篤史・鶴田洋

子絵、根研学会協力での刊行
株式会社 河出書房新社
事由||『はじめての浮世絵』世界にほこる日本の伝統文化』(全3巻) / 深光章士 著の刊行
株式会社 帝国書院
事由||『災害と防災』わかる!取り組む!』(全5巻) / 帝国書院編集部 編の刊行
(学校図書館出版賞大賞は該当なし)

学校図書館賞の鳥取大学附属特別支援学校は、学校図書館未設置も多い知的障害特別支援学校の現状にもかかわらず、充実した学校



学校図書館出版賞を受賞する河出書房新社の小野寺代表

『根っここのえほん』は、全巻、植物画のページに切れ込みがあり、下を開くと地下部分の根が、上を開くと花が見られるしかけの工夫が高く評価された。
『はじめての浮世絵』は、浮世絵の歴史、制作工程、代表的な作家や作品などの基礎知識をわかりやすく解説し、楽しめる。
『災害と防災』は、災害の起こる仕組み、実例を写真や図版を多用して解説し、災害を減らすための各地の取り組みも紹介している。



生徒のニーズに応じる図書館・授業の実践を発表する鳥取大学附属特別支援学校

図書館運営に挑戦した実践報告が範となるものと高く評価された。
学校図書館出版賞の『賢治童話』に登場する当時のことばを5つの章に分類し写真やイラストを多用してわかりやすく解説した。

■日本児童文学者協会 各賞贈呈式

子どもの視点、発想から 見えた世界を表現した受賞作

5月26日(金)、東京都中野区の中野サンプラザにおいて、日本児童文学者協会の各賞贈呈式が行われた。

今年の受賞者は以下のとおり。

●第57回 日本児童文学者協会賞
『なりたて中学生 初級編・中級編・上級編』
ひこ・田中 (講談社)

●第50回 日本児童文学者協会
『日小見不思議草紙』
藤重ヒカル (偕成社)

●第21回 三越左千夫少年詩賞
『ペンを持つとボクね』
柿本香苗 (竹林館)

『ミニスのバイオリン』
佐野のり子 (花梨社)

協会賞のひこ・田中さんは、「子どもの本にはまっただきつかけは、今江祥智さんの『ぼんぼん』を読んだこと。子どもの視点で世界を見ると、こんな風に見えるんだと夢中になった。その『ぼんぼん』と同じ賞をいただけて、うれしいです」と、喜びを語った。

新人賞の藤重さんは、もともと

絵本が描きたくて飯野和好さんに師事したが、「君の絵はたいしたことないから、文を書きなさい」と言われたとのエピソードを紹介。受賞作の挿絵は、飯野さんが手がけている。

三越左千夫少年詩賞受賞の柿本さんは、「詩を読み、書くことでいじいじした気持ちを励ましてきた」、佐野さんは三越さんの詩「かあさん かあさん」を朗読し、「幼いころも、年齢を重ねたいまも、この詩を読むと幸せな気持ちになる」と、受賞の喜びと感謝のことばを述べた。



「今江さん、同じ賞もらったよ」と述べたひこ・田中さん

■第56回全出版人大会

版元の責任と矜持を持った出版活動への決意を表明

5月11日(木)、東京・千代田区のホテルニューオータニで「第56回全出版人大会」(主催/日本出版クラブ)が開催され、出版関係者約550人が出席した。

開会にあたり、野間省伸(日本出版クラブ会長)は「旧来の慣習を打破し、新たな発想の出版活動」と呼びかけた。

大会声明の朗読は、松井清人(大会委員長)が直面するさまざまな問題のなかでも特に懸念されるのは「知恵と情報の供給源」である版元が、出版の将来に不安を抱き、自信や誇りを失いつつあ



松井大会会長の大会声明朗読

ることだとした。弁護士・福井健策氏による、出版社が持つ6つの機能を紹介し、その社会的意義の原点に立ち返り、責任の自覚と矜持を持つて難局に立ち向かうことを求めた。そして、「変革の兆し」

は見えはじめており、変化を恐れず攻勢に転じようと、「忍耐から攻勢へ」をスローガンに掲げた。記念講演はノンフィクション作家の石井妙子さん。石井さんは2006年にはじめて発表した『おぞめ』が多くのノンフィクション賞にノミネートされ、2016年の『原節子の真実』で新潮ドキュメント賞を受賞。直近では、首相夫人の安倍昭恵さんや小池百合子(東京都知事)に関するルポが注目されている。「資料をできるだけ集めて分析し、可能なかぎり関係者にあたる」取材の基本が大事と語った。また、担当編集者の存在が頼りになったといい、出版ジャーナリズムのノウハウはほかのメディアと比べても突出しており、もつと自信を持つべきとエールを贈った。

る。そして、「変革の兆し」は見えはじめており、変化を恐れず攻勢に転じようと、「忍耐から攻勢へ」をスローガンに掲げた。記念講演はノンフィクション作家の石井妙子さん。石井さんは2006年にはじめて発表した『おぞめ』が多くのノンフィクション賞にノミネートされ、2016年の『原節子の真実』で新潮ドキュメント賞を受賞。直近では、首相夫人の安倍昭恵さんや小池百合子(東京都知事)に関するルポが注目されている。「資料をできるだけ集めて分析し、可能なかぎり関係者にあたる」取材の基本が大事と語った。また、担当編集者の存在が頼りになったといい、出版ジャーナリズムのノウハウはほかのメディアと比べても突出しており、もつと自信を持つべきとエールを贈った。

大会 声明

二〇一四年十一月、毎日出版文化賞を受賞した立花隆さんは、当時こう話していました。「書店は情報発信源であり、発信地である。知恵と情報の宝庫である。書店という空間に一歩足を踏み入れれば、今、世の中で何が起きているのか、何に注目が集まっているのか、たちどころに分かる。今は我慢のとき。心ある読者は、必ず書店に帰ってくる」。

大変力強いエールでしたが、それから二年半が過ぎた現在、書店はかなりのスピードで数を減らし、全国で一萬三千店を割り込むのではないかと懸念されています。

物流をめぐる深刻な危機、軽減税率適用に向けての苦しい闘い、図書館との共存、さらにはネット上にはびこる悪質な違法サイトなど、いま出版界が直面し、急いで解決しなければならない問題は枚挙にいとまがありません。しかも、すべての懸案は、版元独自で対応できるものではなく、版元・取次・書店が一体となつて取り組まなければならない難問ばかりです。

何より懸念されるのは、「知恵と情報の供給源」である版元が、出版の将来に不安を抱き、自信や誇りを失いつつあることでしょう。デジタル化の大波に揉まれる中で、われわれ出版人は、その変化のあまりの激しさに、とまどい、揺れ動き、ひたすら対応に追われ、生き残る道を探して彷徨っています。「知恵と情報の発信源」である書店と同様、「知恵と情報の供給源」である版元も大きく揺らいでいるのです。

著作権の第一人者として知られる福井健策弁護士は、出版社には六つの機能がある、と言います。

- ① 「発掘・育成機能」 雑誌・書籍などの出版物を通して、書き手を発掘し、育てる。
 - ② 「企画・編集機能」 出版物の創作をサポートし、時にリードする。
 - ③ 「ブランド機能」 文学賞や雑誌媒体の信用によって、書き手や出版物を紹介、推奨する。
 - ④ 「プロモーション・マーケティング機能」 出版物を宣伝し、様々な販路を通じて展開する。
 - ⑤ 「投資・金融機能」 ①から④までにかかる様々なコストとリスクを負担する。
 - ⑥ 「マネジメント・窓口機能」 出版物の二次展開において、窓口や代理を務める。
- 規模の大小にかかわらず、すべての版元は六つの機能を併せ持っています。すべての出版人は六つの機能のどこかに関わって、出版文化を支えてきました。今こそ、われわれひとり一人がその責任を自覚し、矜持をもって難局に立ち向かわなくてはなりません。
- 忍耐強く頑張れば、いつかは報われます。そんな「我慢のとき」は、もはや限界に近づきつつありますが、それでも変革の兆しは見え始めています。書店発のベストセラーがいくつか誕生し、取次の提案をうけて版元が新しい商品を開発し、さらには複数の版元がスクラムを組んで、同じ作家の異なる作品の新聞広告を同時に打つといった、読者に出版物を届けるための新しい試みも目につくようになりました。変化を恐れず、斬新な発想で攻勢に転じる、「忍耐から攻勢へ」をスローガンに掲げて、大会声明を締め括ります。

平成二十九年五月十一日

第五十六回 全出版人大会

■野間読書推進賞受賞者の活動

「読者論」スタイルで読書推進！

院内石橋ゆめ本の蔵 岩本 紘一

「読者論」スタイルとは？

「読者論」は日本では1969年初版の外山滋比古氏の『読者の世界』の「読者論の前提」が一般的には初出であると思う。

私の読者論との出会いは、教師駆け出しのころだ。地元大学に半年間国内留学した際、いまは故人の佐々木均太郎教授から、読者論に立つ文学教材研究のあり方について講義を受けたのが最初。

その後、作品の読み方を読み手一人ひとりにゆだねる読者論スタイルは、教師として子どもの意見や発想を重視する指導に、また、日常の対人関係にも、「本の蔵」の運営でも、さらには私の生き方の基本姿勢に生かされた。

「本の蔵」と子どもたち

大分県宇佐市の山間にある、大人も子どもも楽しめる個人図書館「院内石橋ゆめ本の蔵」。私が長年にわたり収集・保存してきた、貴書・奇書・珍書・雑誌・コミックなども含む書籍約3万冊で、2004年に開館、その2年後には野間読書推進賞奨励賞をいただいた。さすがにそのころは「読者論」の意識はなかったが、年々減少する児童との交流交換では、子どもたちが孫のように思えてならなかった。

当時、担任や教頭先生に引率された子どもたちとの絵本などを通じた交流は、その後、学校での「こかけ出前紙芝居」に発展、学年末には「本の蔵」でお礼の手作り紙芝居の上演など、夢のような楽し

いひとときであった。

「読者論」で読み楽しむ『平家物語』

4年前の年末、当地区に移住してきたK氏の提案によりはじめた『平家物語』の全巻朗読会は、現在も営々と継続している。山間へき地のこのユニークな取り組みは、数々のマスコミに報道され一躍有名になった。

『平家物語』全巻の読了は、当初、本年(2017年)末を予定していたが、平均7〜8人の会員で読みたいが、平均7〜8人の会員で読めることに充実、満足の朗読会となっていた。

物語の人物関係把握をベースにして、そのなかの重要な語句の掘り下げや物語としての表現の工夫、現代の世情との比較など、みんなでワイワイやっているのが楽しいが、時間は矢のごとく過ぎることから進度の方は大幅遅れ。かくして全巻朗読完了は数年先という次第。

第六巻「葵前」を例に、楽しさ

の一例を紹介しよう。

「葵前」は、『平家物語』のなかでは極めて異例な、高倉天皇の恋物語である。「葵前」とは高倉帝が生前愛した下級の少女で、当時天皇に仕えていた女御の召使いである。

この段の重要語句のひとつは「咫尺」で「しせき」と読む。ここでひとしきり、その意味や効果について語りあった。「咫尺」は古代中国の長さの単位で、約25cm。下級の少女が天皇に見初められ、咫尺の距離で玉顔を拝すると、使われている。紙数の都合で詳細は略すが、少女はやがて「葵前」と称される大出世をとげるが、周囲のねたみを心配した帝は、葵前と距離を置く。帝は葵前への気持ち、次の和歌に託す。

「忍ぶれど色に出でにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで」
ところが、事情を忖度した役人が和歌を葵前に届けてしまった。さあ大変、葵前は「かほをうち赤らめ……」ついに寝込み、しばらくして亡くなってしまう。なんとこの大いに盛りあがった。

なぜ葵前は急に亡くなったのか
*忖度した役人のせいだ……
*天皇もやさしいだけではだめだ



『平家物語』全巻朗読会100回達成時には記念イベントも開催した

*葵前は天皇の歌に恐れおののき、肝のつぶれる思いだったのか
*昔もいまも「忖度」の功罪は大きいね……
など、終了後もつきはてぬ感想や意見が飛び交ったことは言うまでもない。

広がる「読者論」朗読会

ここ最近、宇佐市民図書館でも同様の朗読講座開設が予定されているし、県都の大分市でも、読書論を生かした『平家物語』の朗読実演の日程が決定した。加えて定期講座の依頼も受けるなど、過疎地発の「読者論」はいま、急速に広がりを見せている。

なお、「本の蔵」は現在、地域の文化総合誌「宇佐文学」の編集所としての機能も果たしている。



児童書・絵本も多数ある「本の蔵」には地元の小学校が授業で訪問した

優良読書グループの歩み (6)

2016年度の「読書週間」に際して都道府県読書推進連動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。

(順不同)

このへ読書会

代表者 三浦真理子

青森県三戸郡五戸町

〈推薦〉

青森県読書推進運動協議会

1998年、わが町に公民館図書室から昇格した、待望の図書館が開館した。

館内は高い天井と木製の梁が温もりを与えてくれる。新しい本は活字のインクの匂いがするようだし、少し茶色くなった本からは独特の手ざわりと香りがするのにも興だ。

そんな図書館とときを同じくして、私は「このへ読書会」を立ちあげた。図書館活動のひとつとして要請されたことも一因だったが、私もなにかお役に立てればと、八戸市内の読書会で学んできたノウハウを活用して、本好きの方々に集まってもらった。

1998年6月、19人の会員で

発足した。次年度は24人まで増えたが、現在は15〜16人で推移している。事務的なことは図書館職員が引き受けてくださり、このサポートにはたいへん感謝している。

それからときを経て……昨年の2015年には例会が100回を迎えた。隔月開催で「細く長く」を言葉に集まっていたが、ときの積み重ねはありがたいものである。数年前から男性ふたりが会員に加わったので、本へのアプローチに

幅が出たように感じる。

集まる世代が異なると、相互推薦のテーマ本に挙げられる本が変わってくるのもおもしろく、昨年の総会資料に「100回の歩み」としていままでの活動を振り返り、100冊分の題名を記録として載せてみた。会員のみならず、「ああ、こんなないつの間にか読んだのねえ」との声がしきりであった。

さらに、毎年総会時には町内の文化人や教育関係者に講演を依頼し、おはなしを聞くたびにわが町の文化民度の高さに驚かされた。

これから先、何年、読書会活動に携わっていただけるか。理想としては、本を読みながら人生の始末も考えられたら、すばらしいのだが……机上の空論に終わるのか、いや、自分たちへの励ましとして会員とともに「本」の世界を楽しむこととしよう。

お話まっぼっくり

代表者 成島 和子

茨城県守谷市

〈推薦〉

茨城県読書推進運動協議会

私たちの会は1985年、公民館主催の講座を受講したことがは

じまりでした。当時はまだ町で図書館もなく、公民館図書室に3万冊あまりの本(子どもの本も含めて)があるだけでしたが、熱心な職員がいて先生方の紹介などいろいろ助言をしてくださるなかで会を立ちあげ、勉強会やおはなし会をはじめました。

町の広報誌に子どもの本のブックトークを10年ほど交代で書かせてもらえたことも、いい勉強になりました。

いまのように活動の幅が広がったのは、守谷市立中央図書館が開館(1995年)してからです。

徐々に学校や幼稚園からおはなし会の依頼が来るようになり、いまでは毎月小学校3校、図書館幼児向けと赤ちゃん向け)、児童館(2か所)のほか、デイサービスなどにも出かけています。季節や年齢・学年にあった絵本など、プログラムを考えることはたいへんですが、子どもたちの笑顔に出会えることで喜びと力をもらっています。

最近、会員も5人増え、15人になりました。課題のひとつであったボランティアの確保が解決して、うれしく思っています。

現在、毎月の定例会では講師の前で覚えたおはなしを語り、アド

他団体、後輩たちとの交流も活動の力



バイスをいただいています。また、各自絵本を持ち寄り、内容などを話しあっています。今年はパネルシアターを増やして、0〜3歳児向けにわらべ歌や手遊びにも力を入れていきます。

昨年、子どもゆめ基金の助成を受け「読み聞かせボランティア養成講座」(6回)を開き、好評を得て終了しました。そこに参加された市内のボランティアグループの方たちの声から、グループ間の横の繋がりを模索することになり、いま連絡会の結成に向けて準備会をしています。

そこではグループ間の情報交換、おはなし会のレベルアップとボランティアのすそ野を広めるた



細く長く、100回以上読書会を積み重ねて

めの研修会や勉強会を行う方向で進んでいます。一歩先駆けておはなし会を長年続けてきたものとして、これからボランティアを目指す若い方たちが仲間になってくださるよう、努力していきたいと思えます。

そして、人と人が繋がっていくことで活動も途切れることなく続き、子どもたちがよい絵本に接することで夢や希望を持ってもらえたらと願い、活動しています。

向東小学校PTA読書サークル「あひる文庫」

代表者 掛谷 節子

広島県尾道市

〈推薦〉

広島県読書推進運動協議会

私たちは33年前に、尾道市立向東小学校のPTA活動として発足しました。子どもたちに本の楽しさを伝えようをモットーに、絵本の読み聞かせがはじまりました。そのうち、絵本を紙芝居にし、その後、創作紙芝居を作るようになりました。いまでは30作以上になりました。支えてくださった当時の先生方にはとても感謝しております。放課後や昼休みの休憩時間などに読み聞かせをしていましたが、

10年ほど前から授業中に学校内の図書室で全学年に読み聞かせをするようになりました。「あひるのおばちゃん」が、絵本や話を聞かせてくれて本が好きになりました」と、子どもたちがからうれしいことばをもらい、活動が徐々に認められてくると、町内の幼稚園や保育所からも依頼され、月に一度、定期的に出かけるようになりました。

向東小学校は近年、保・幼・小・中・地域と一体となり、コミュニティスクールになりました。そのため、学校間の連携、地域との関わりが強く、町内の老健施設なども訪問するようになり、定例化しています。また、夏休みの学童の



手作り紙芝居(上)や絵本の読み聞かせ(下)を子どもたちへ

地域のイベントにも依頼があり、出かけています。

中学校では、総合学習で生徒が幼稚園や保育所に読み聞かせに行きます。そのときに絵本の貸し出しやアドバイスをし、それが縁で、以前から熟望されていた中学3年生への読み聞かせも実現しました。

紙芝居は地域にあるお寺を題材に再話した『田植観音』や、小学生が地域を学ぶ総合学習のときに一緒に参加し、再話して作った『和泉式部伝説』など、手作りの台本をもとに絵も部員が協力して、下絵から色ぬりをして制作しています。

部員のなかに小学校へ子どもを通わせている親がいなくなり、存続が危ぶまれていましたが、昨年からは現役のPTAのお母さんが入り、活動しています。スケジュール調整のための月1回のサークル会のほか、年に数回、花見や忘年会、親睦会をしています。

尾道市立向島子ども図書館でも月に一度、読み聞かせをしています。このたび、館長さんに「優良読書グループ」として推薦していただき、まことに感謝しております。これを励みに、15名の部員が心をあわせてがんばっていきこうと思っています。

すみれ会

代表者 真島 康子

佐賀県佐賀市

〈推薦〉

佐賀県読書推進運動協議会

第70回 読書週間の記念すべき年の表彰は、今後の活動のさらなる推進に資する機縁となると、感謝の念でいっぱいです。

すみれ会は、2003年に成立しました。老若男女の、読書好きで読書を心の糧とする友の集まりです。

佐賀県読書グループ連絡協議会に属し、年中行事の諸活動に多数参加し、知的好奇心にあふれ、たがいの交流を深めています。協議会の諸先輩方は各地で活躍され、記念誌5冊をひもとくと、歳月の重み、継続の力に驚きの念があふれ、あらためて読書のすばらしさに感動します。

協議会の合同読書会に臨むにあたって、すみれ会では、事前に各自関連の本を読み感想を述べあいます。共感したり、読み方の違いに感心したり驚いたり、興味がつきません。今年夏は夏樹静子氏の『幻の男』について、作品と佐賀

との関わりを大草秀幸氏の講演で聞き、自分の読書ジャンルをこえた新しい未知の世界へ誘ってもらいました。

協議会の文学散歩にも、毎年多数参加しています。話題性に富むそれぞれの地の文化歴史にふれ臨場感あふれる新たな発見と喜びにひたることができます。その後、関連本を読み、認識を新たにします。「見て知り、知って見よ」のことばのように見聞を広め深める大事な催しです。心と体に栄養がいきたる思いがします。

すみれ会で毎月1冊の本を読み、感想を語り、関連作家の本や話題にふれることで、読みが広がり、深まっています。11月の例会では、白洲正子氏の『行雲抄』を読み、会員それぞれの興味ある内容を話しあいました。人生経験の豊かさが感想のなかにも表れ、年齢差も味わい深いです。文章の書き方、言語・ことばに対する洞察、作者の行動力や人生の楽しみ方、神社仏閣の歴史・美術、はては白洲次郎にまで話題がおよび、話に花が咲きました。

次回は、今秋、文化勲章を受動された作家 平山智枝氏の本を、各自読書中です。和気あいあいの読書会を今後も続けていきたいです。

■学校図書館整備推進会議がパンフレット作成

学校図書館図書整備等5か年計画を
実現するヒントを紹介

政府による第5次「学校図書館図書整備等5か年計画」を受け、学校図書館整備推進会議はパンフレット「学校図書館の出番です」を発行した。

このパンフレットは「なぜ、学校図書館が重要なのか」を実践例などで紹介する。一方、多くの学校図書館が蔵書不足、学校司書の配置も不足していることなどをデータで示すことで、学校図書館図書

館整備費の予算化の重要性を訴える。また、学校図書館整備費の予算化を訴える読願書のひな型や提出方法なども紹介している。パンフレットご希望の方は、学校図書館整備推進会議まで、ホームページよりダウンロードも可能となっている。

【パンフレット申込先】
学校図書館整備推進会議（日本児童図書出版協会内）
kodomo@kodomo.gr.jp（件名は「パンフレット申込」とする）
http://www.gakuto-seibi.jp/（発行物のページよりダウンロード可能）



学校図書館の充実のための情報が
つまったパンフレット

■日本子どもの本研究会が賞を創設

子どもの本と読書の研究の
新たな挑戦のきっかけに

日本子どもの本研究会は、創立50周年記念事業の一環として、日本子どもの本研究会実践・研究賞を創設した。この賞は、同会の会員、学生会員、「子どもの本棚」の定期購読者のうち、「子どもの本」に関するすぐれた実践ないし研究をなした個人またはグループを表彰するもの。

第1回となる今回の公募には、9点のいずれが劣らぬ素晴らしい実

践・研究の応募があった。選考委員会では厳正な審査を実施し、以下の結果となった。（敬称略）
●実践研究賞 大賞
金子多美江（埼玉県）「読書の喜びを広げ深める『フィリピン・少数山岳民族の村落マガタを中心に』」

●実践研究賞 奨励賞
藤重郁子（兵庫県）「絵本の読み聞かせ」相互評価から見られる保

●実践研究賞 特別賞

育者養成学生の実態
上島陽子（長野県）「ブックトーク」
田中昭子（山梨県）「物語理解における子どもの発達―因果的思考を中心に―」

大賞の金子さんは、1995年から永年にわたり埼玉の海外教育支援協会の中心的なメンバーとして、フィリピン・マガタへの読書活動支援・図書館設置に関わる活動を行ってきた。
同会では、これらの実践・研究表彰が、会員活動の活性化と次世代の新たな挑戦への励みになることを願っている。

事務局報告（5月）

- ・3日（5日）「上野の森親子フェスタ2017」開催
- ☆9日「機関紙『読書推進運動』（594号）データ入稿
- ・10日「日本書店商業組合連合会主催『春の書店くじ抽選会』」に出席
- ☆10日「第60回子どもの読書週間ポスターイラストについて荒井良二さん、杉浦康平さんと打合せ
- ・11日「『第56回全出版人大会』に出席
- ・12日「伊藤忠記念財団と今年度子ども文庫助成事業について打ちあわせ
- ☆12日「絵本文化推進会議運営委員会」に出席
- ☆12日「平成29年度 第1回 子どもの読書推進会議幹事会案内を送付
- ☆15日「機関紙『読書推進運動』（594号）発行
- ・16日「上野の森親子フェスタ2017」について図書印刷と打ちあわせ
- ・16日「上野の森親子フェスタ2017」運営委員会に出席
- ☆17日「平成29年度 定時総会」について議事録に長室と打ちあわせ
- ☆18日「野間読書推進賞推薦願いを関係団体に送付
- ☆19日「日本児童文学協会賞贈呈式」開催案内を送付
- ・19日「日本児童文学協会賞贈呈式」に出席
- ☆23日「平成29年度 第1回 理事会」を開催。出席理事12名、出席監事3名、欠席理事3名、平成28年度事業報告および決算報告、「新役員候補者」「新会員」を承認
- ・24日「絵本ワールド・イン・ふくしま」福島民報と打ちあわせ
- ・25日「『講談社出版文化賞贈呈式』」に出席
- ・26日「日本児童文学協会賞贈呈式」に出席
- ・30日「日本雑誌協会懇親パーティー」に出席
- ・31日「絵本ワールド2017」について児童図書出版協会と打合せ

●編集部 & 事務局の
ひとこと

●毎年この時期に行われるのが、日本児童文学協会と日本児童文学者協会の各賞贈呈式。受賞者挨拶ももちろん、主催者挨拶、選考経過報告もそれぞれの会を代表する作家が行う、ぜひいたくなひとときです。記事で紹介できなかった、心に残るひとことを……

●「世界でいろいろなことが動いている。児童文学の書き手になることができるのか。それは、いろいろな境遇の子どもの心にまっすぐ届く物語を書くこと、そうあるように努力することだと、ますます思っています」（矢部美智代さん）

●「東京大空襲を忘れない」は、事実を冷静に見つめる視線と、あたたかい語り口の作品。まだまだこのテーマで書くことがあると、励まされました」（井上こみちさん）

●「60を過ぎて、人生って短い。時間を大切に思うようになりまし。この10年、ひたすらに途切れなく仕事ができたのはすごいこと」（いもとようこさん）

●「ひこ・田中さんへの賞の贈呈で、うちの会は漸進的な姿勢を見せた」（内田麟太郎さん）

●「受賞者の挿絵について」川上裕己くんが小学生のときに描いた絵が、私の詩の世界を広げてくれました。ありがと、川上くん。これからも、大好きな絵をいっぱい描いてね」（柿本香苗さん）川上くんは2歳のときに筋ジストロフィーと診断された。現在、中学校2年生の「ペンを持つと空だって飛べちゃう」男の子です。（伸）